アメジスト紀

北爪満喜（きたづめまき）

北爪満喜
きたつめまき

アメジスト紀

著者　北爪満喜
発行者　小田久郎
発行所　株式会社思潮社
〒一六二　東京都新宿区市谷砂土原町三―十五
電話（三二六七）八一五三（営業）・八一四一（編集）・八一四二（FAX）
振替東京八―八一二一
印刷所　相良整版・福田印刷
製本所　岩佐製本
発行日　一九九一年五月一日
ISBN4-7837-0347-7 C0092

アメジスト紀

北爪満喜

裴頠　芦澤泰偉

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

1、キリエ

単独なメロ　10
キリエ　16
鏡だけはしらんぷりした　26
秋のプール　32
しなやかに街は呼吸して　36
なわとび　46

2、幻鏡

ガラスの野〈I〉　58

ガラスの野〈Ⅱ〉 64
紺色の枠 70
スピリット 76
天狼星（シリウス）の時 82
幻鏡 90
CACTUS 98

3、スクリューのようにねじれ換気している肖像

白色光 106
オパレッサン光る 110
スクリューのようにねじれ換気している肖像 116

アメジスト紀

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

キリエ

単独なメロ

シーツには
　うっ血した夢の手足をたばねて結び
　　ひそかにすてさり
ためいきをつく
あめのあさ
ばら色の花がくつがえるよう　ぼくは秘密の目蓋をひらく
砂を潜った涙をそえて
やわらかな二枚貝の見る（　彼女は至福の輝きの繭）
たえきれないぼくが変換する　それ
かなしいといわずにそだてた真珠

虚空のうてなにゆらめきつづけるまばゆい結晶体なんだ
しかし　ぼくはベッドを通過し
深海にでる
　つなを切る　闇のうねりになげうちまかせ
　微笑んでみる
　（かえせはしない）
　（ゆめにくるまれもどりはしない）

ひどく青を飲んでしまった
服や日付がばらばら落ちる
ひび割れが　床を走り去る
部屋には椅子もなにもなくなり
ひと番の眼球だけが　つるりとにじみ浮きあがる
（すべりおちてもいいか　ドラセナ）
ベランダの鉢に聞いている　ぼく

そう　ぼくは眼球なんだ

ぼく以外には合いカギのない
鈍色に塗りこめられてゆく
じりじりと犯されてゆく

つめたい真珠に　みつめられ
ふたたびぼくへと　くべられる
この幽閉
レンズが　割れてしまうでは

ピンボールの遊びでもはじめなきゃ
絶間なく　移ってゆけるため
屈折へ請われる遮るピンや仕切りのゆくへはどうするの？
だけどまったく困らないんだ

「昨日」の裾から写真は焦げて黒く固まり
右端　強く叩きだされては　暗がりへ　ほらまた
うちあたる　（くぼんでよどむ斜めの天井）
うなるスケジュールの誹謗をかぶって花瓶のばらがブリキにな
った昨日を忘れてゆけそうにない
鈍い軌跡が　振出しへゆく　バーにうちつけられるたび
まるで　胸中に記憶する　止まったままの扇風機？
モノクロの　スチールの　ずれ落ちずれ落ち旋回している奇異
な映像を抱きとめている
ゆらめきさえもそなわって
なんなく　はじきかえしてくれるったら
ピンボール
鋼鉄のポップコーン序曲を挿入したくなる
フライパン　に耳をよせてよ
ほら　多角な転調が　ぼくの曲線をアレンジしてゆく

はしゃいで
器官のうらがわまで
ひとっとびする　回転にも耐え
うちつけられてゆくぼくの
ひびきがこんなに　螢光している
潜在するサクレツ音を　見張って閉じているドアーの色　か
あざが　浮上ってくる

「ひらかない唇のかたち」のドアーを
くぐっても　くぐっても辿りつけない
ふりつもる塵の部屋べやを
ぼくが　足跡をつけてゆく
あさい沼をならべるように　青いぼくの歩幅の
沼が
冷たく　塵を踏んでゆく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com